

1946年昭和南海地震

(石橋克彦：南海トラフ巨大地震—歴史・科学・社会、岩波書店、2014、18-24)

2014年9月5日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

1945年(昭和20)年8月に戦争が終わった翌1946(昭和21)年12月21日4時19分、M8.0の巨大地震が西日本を襲った。揺れは東北地方南部から九州全域まで感じられ、紀伊半島、四国南半、瀬戸内海沿岸、大分県、東海地方などが震度5ないしそれ以上となった。

大津波は房総半島から九州南部にまで及んだ。さらに地震に伴う顕著な地殻変動が生じ、紀伊半島や室戸半島、足摺岬が隆起し、高知市、須崎町(現、須崎市)、宿毛町(現、宿毛市)が沈降した。沈降は紀伊水道南部の両岸や四国北東部の瀬戸内海沿岸でも若干みられた。道後温泉では4つの源泉の水位が低下して自噴を停止し、和歌山県白浜町でも湯崎温泉と白浜温泉が湧出停止した。その他井水の上昇や下降も各地で生じた。

この地震・津波による被害は中部地方から九州までの25府県に及び、死者・行方不明者1443人、建物全壊1万1661棟、家屋流出1451棟などとされている。ただし、被災地の多くが戦災による焦土にバラックが建っている有様だったから、損壊建物の数字にあまり意味があるとは思えない。道路・橋・堤防・港・船・農地などにも甚大な被害が及んだ。

高知市は空襲で1万2000戸近くの消失と438人以上の死者を生じていたが、地震で1000戸以上が倒壊し、231人が死亡した。津波は高くなかったが地盤沈下と堤防決壊で広範な市域が水没した。四万十川の沖積平野で地盤が悪い中村町(現、四万十市中心部)は約2300戸中1600余戸が全壊、さらに火災で60余戸が焼失し、約270人の死者を出した。県道の四万十川橋は鉄橋部分8スパンのうち6スパンが落ちた。和歌山県新宮市は1944年の東南海地震に続いて1945年の空襲と艦砲射撃でも被害を受けていたが、本地震で死者58人、全壊600戸、全焼2400戸の大被害をこうむった。太平洋側ばかりでなく、徳島県の吉野川流域、瀬戸内海の南北両岸、大阪府、岐阜県、大分県などの沖積地でも相当の震害があった。かなり遠い島根県の出雲平野でも家屋全壊70棟、死者9人などの被害を生じた。

津波は襲来が早く(早いところでは地震後5~10分)、多くの場所に共通する特徴として①最初は静かで流速が小、②大波は3~4回で第2波や第3波が最大、③第1波の前に退潮があったらしい、といわれている。波高は歴史地震に比べて全般に低かったが、本地震としては地震動以上の猛威をふるった。推定された津波波源域是那智勝浦の沖から高知市の沖まで広がっており、おおまかにはこれが震源域を示しているだろう。

震源域内の余震のほかに、やや北方の四国東部~紀伊水道周辺でも地震が多発し、さらに本震前は静穏だった近畿、山陰、九州中部の地震活動も活発化した。

本地震は、敗戦の痛手から立ち直ろうとしている西日本に甚大な被害をもたらしたものではあったが、1854年安政南海地震や1707年宝永地震に比べれば、各地の地震動も津波も明らかに弱く、地震そのものの規模が小さかったといえる。

本地震が規模以上に被害を被った一番の理由はやはり戦後直後で、復興が進んでいなかった土地に地震が発生したためであると考えられる。地震が発生したときのために備えるだけでなく、万が一発生したとき、いかに余震や次の地震に備えながら何を優先的に復興していくかも考えていく必要があると教訓となる歴史的出来事であった。